

便利すぎるチユートリアルスキルで異世界

ほよんほよん生活

Omine
著 御峰。

3

CHARACTERS

—登場人物紹介—

天使 スライム

羽が生えた
新種のスライム。

猫 スライム

猫のような
新種のスライム。

ガイア

エデンイール
世界の女神。

ステラ

世界の平和を
願う聖女。
実は策略家。

エヴァ

現魔王。
魔族たちから
慕われている。

リオ

熱心な
魔道具研究者で
犬耳族の少年。

コテツ

ワタルが前世で
飼っていた柴犬。
強い。

エレナ

しっかり者で
元気な
猫耳族の少女。

ワタル

本作の主人公。
勇者召喚に巻き込まれ、
8歳児に転生。
なぜか
チュートリアルスキルが
ずっと使える。

第1話

ダンジョンを攻略して鬼人族の里は以前とは大きく様変わりし、とても活気の溢れる里へと変貌した。

里の発展を祝いつつ、これからも僕たちにできることは協力することを約束して、シェーン街に戻った。

僕たちはスキル【拠点帰還】で一足先に戻っていた。数日掛けて帰ってきた猫耳族ねこみみのゲラルドさんに奥さんのエリアナさんが抱きついたので少し嬉しかった。いつもはそういうそぶりをあまり見せないエリアナさんだけど、やっぱりゲラルドさんのことが大好きなんだと分かる。

シェーン街では鬼人族の里のダンジョン攻略を祝ってお祭りが開かれた。それくらいダンジョンでの戦いは長かったからね。

嬉しそうにジョッキで乾杯をする鬼人族のエルラウフさんとその弟で前鬼人王のベンジャミンさんにゲラルドさん。旅の道中ですっかり仲良くなったみたいで、僕もすごく嬉しかった。

そんなシェーン街に平穩が訪れるかと思っていた矢先、次なる問題が起きた。

「抜け毛？」

ゲラルドさんの娘のエレナちゃんと僕の声が被る。

『そうなんだ。僕たちはこの時期になると毛がいっぱい抜けてしまうんだけど、他の種族からいつも苦情が来るんだよ』

白狐族のアルトくんの相談を聞き、一緒にいた魔王のエヴァさんの表情が曇る。

「エヴァさん？」

「それは困ったわね。白狐族の毛変わりは……すごく大変よ！」

「えええええ！」

毛変わりが大変？ どういうことだろう？

エヴァさんは「こうしてはられないわ！ 知らせてくれてありがとうね！ アルトくん！」と言いつつ残して、急いでその場を後にした。

僕たちも気になって、急いで白狐族が過ごしている白狐区に向かった。

白狐たちは外でひなたぼっこをしていて、それを見て癒されている観光客が大勢いる。

一応、見世物とかではないので、彼らを眺めたい観光客には遠くの場所から見るようにお願いをしている。ちゃんと注意書きも作った。

「グレースさ〜ん」

『ワタルくん。来てくれたのね』

グレースさんは、アルトくんのお母さんだ。

「はい。アルトくんから相談があって、抜け毛が大変だと……」

『そうなのよ。私たち白狐族の毛変わり時期でね。一気に抜けてしまうのよ』

「毛変わりがそんなに大変なんですか？」

『人族は毛変わりがなし、他の種族もそれほど大変ではないからピンと来ないかもね。私たちにとっては、それほど大変ではないの。ただ、周りが大変になるだけで……』

「周りが？」

その時、声を響かせる魔道具によって、遠くからエヴァさんの声が聞こえてきた。

「みんなあああ〜！ 白狐族が毛変わりするらしいので、白狐族の住処すみかには決して近づかないように！ 特に子どもたちを近づかせないでちょうだい！」

すると、周りにいた大勢の人たちがざわつきながら離れ始めた。

「ワタルくんたちも離れるのよ！」

遠くからエヴァさんが僕に声をかける。

「一体何が起きるんですか!？」

すると、白狐たちが何やら動きを見せ始めた。

白狐族の子どもから大人まで、身体というよりは毛がブルブルッと揺れ始める。

直後、目で見えるくらい——バチバチと音を立てて電気を帯び始めた。

雷を巧みに操り攻撃に使うアルトくんたちは、幼い頃から雷が身近なんだな。

雷は段々と白狐たちを撃ぐようになり、やがて大きな雷の化け物のよう見え始めた。

「これが白狐族の毛変わりよ。毛が抜ける時に激しい雷を放つんだけど、彼ら自身で操作できるものではないから、周りの他種族に当たってしまうととても危険なのよ」

近づいてきたエヴァさんが説明してくれる。だからエヴァさんは焦って他の住民を逃がしたんだな。それに他の皆さんも知っていたからこそ、素直に従って逃げたんだ。

「ワンワン！」

それを見た愛犬のコテツが吠えると、エヴァさんが驚いた表情を見せた。

「えっ？ それは本当？ コテツくん」

「ワンワンワン！」

エヴァさんとコテツが何かを話し合っている。

エレナちゃんと一緒に並んでコテツを見つめる。

「本当に信じていいのね？」

「ワフッ！」

「分かったわ。それなら私も近くで見たいのよね？」

「ワン！」

今度はコテツが僕の足に乗り掛かる。

「ワンワン」

「えっ!? 勇者モードになりたいの？」

「ワフン」

「勇者モード」とは、コテツが聖剣エクスカリバーを啜えると、毛が白く光り輝く状態になることだ。理由は分からないけど、コテツがそう言うならばと、聖剣エクスカリバーを召喚してあげると、コテツが白い光を放って勇者モードへと変わった。

ダンジョン攻略以降使っていなかった空飛ぶマントも着用すると、地面から浮き上がった。そしてそのまま白狐族のところに向かう。

何が起きるのか楽しみにしていると、次の瞬間、宙に浮いたコテツが白虎たちの雷の中に突撃した。

「コテツ!? 危ないよ!？」

まさか……雷に突撃するために勇者モードに!？」

すると白狐たちが放っている雷が、コテツが啜えているエクスカリバーに集まり始めた。

「すごいわね……聖剣だから雷が集まるのかしら？」

「そーいや、勇者って雷魔法が使えましたね」

「ええ。魔族特攻の攻撃魔法ね。コテツくんのおかげで、また勇者と戦うことになっても心配ない

わね。そういえば、そろそろ人族との対談の日が近いわね……」

僕と勇者が戦った後日、人族の代表の皆さんと話し、魔族との対談を行う約束を交わしていたのだ。

「エヴァさん、対談っていつなんですか？」

「あれ？ 聞いて……ない？」

「えっ？ 聞いてないですよ？」

「ええええ!?」

「ええええ!?」

エヴァさんと一緒にびっくりする。

彼女の視線が僕の隣にいるエレナちゃんに向いたので、僕もエレナちゃんを見た。

「あれ？ 言うの忘れたかも〜!」

「こらっ。大事なことなんだからちゃんと伝えてくれないといけないでしょう!」

「えへへ〜ワタルッ！ 対談日は—— 明後日だよ？」

エレナちゃんの言葉と共に、強烈な雷がコテツに直撃して、すさまじい轟音が街中に響いた。

眩しい光がやみ、宙に浮かんでいたコテツがピカピカと光りながらこちらに降りてきた。

「ワンワン！ ワフ〜ッ!」

「おかえり。コテツ。僕たちを守ってくれてありがとうな」

帰ってきたコテツの頭をわしゃわしゃと撫でてあげる。

「ん？ コテツもそろそろ衣替えしようか？」

「ワンワンワン!」

ものすごい勢いで尻尾を振る。毛もそこそこ伸びてきたし、ブラッシングくらいはしてあげないとね。

その時、エヴァさんが僕の後ろ——白狐たちの方向を指差して驚いた声を上げた。

「ワ、ワタルくん！ あれを!」

視線を向けてみると——巨大な毛の玉が置かれていた。

『ワタルくん。これは私たちの抜け毛の玉だけど、ワタルくんのもだから好きにしてくれていいわよ』

毛玉を置いたのはグレースさんだった。

「え!? これ、もらってもいいんですか？」

『ええ。私たちは使わないけど、確か人族はよく使っていると、カミラから聞いたことがあるわ』カミラさんに視線を移すと『ええ。人族や魔族の間では高級素材として有名よ』と教えてくれた。

これをもたらしても僕には使い道がないから、エヴァさんを見たが、その瞬間「お願い! あげるなんて言わないでよね! 私、そんな貴重なものはもらえないし、魔族の英雄でもあるワタルくんこそもらうべき人なのよ! 絶対に渡すなんて言わないでよね!」と先制して断られてしまった。

自分の身体よりも遥かに巨大な毛玉をどうしようかなと悩んだが、このまま放っておくのも悪いなど思っただけで持ち上げてみると、意外と軽かった。そのまま家に持って帰った。

庭にある巨大な毛玉をどうしようと眺めていると、チャイムの音が聞こえてきた。

「は〜い」

扉を開くと、初めて見る魔族の方が佇んでいて、柔らかい目で僕を見た。

エヴァさんと同じデモン族だと分かる頭の角と背中。髪の毛が少し白髪なので年齢はだいぶ上のようなのだ。

「初めまして。ワタル様」

「初めまして〜」

「急な訪問に伝えてくださりありがとうございます。私はデモン族のエンゲージと申します。少しだけお時間をいただけますか？」

「いいですよ。もしよかったですら中にどうぞ」

一緒にいるコテツも警戒していないし、表情も柔らかいし、初めましてだけで家に入れても問題ないかなと思う。

家の中に案内しようとしたら、エンゲージさんは庭でスライムたちとくつろいでいるエレナちゃんたちを見て、できればそこで話したいと言う。

すぐに庭にあるテーブルに案内すると、スライムたちも興味津々の様子で彼を足下から見上げていた。

スライムたちを笑顔で見つめるエンゲージさんに、いつの間にかエレナちゃんが家の中から紅茶を持ってきてくれた。

いつもエレナちゃんの優しさには大助かりだ。

紅茶を一口飲んだエンゲージさんが笑みを浮かべて言う。

「美味しい紅茶をありがとうございます。お嬢さん」

「えへへ〜」

「街を彩るスライムたちがワタル様の従魔だという噂は本当だったのですね」

「はい。最近どんどん増えてくれて、とても助かっています」

シェーン街にある『ぼよんぼよんリラックス』は大きな観光の目玉にもなっている。

スライムたちが脚光を浴びるのは嬉しいことだ。

「色んな魔族から愛されている人族…なんて素晴らしい光景でしょう。魔族の一人としてとても嬉しく思います」

エヴァさんからデモン族って少し難しい人が多いと聞いていたのに、喜んでくれるエンゲージさんを見て、やっぱり優しさに種族は関係ないと思った。

「私が訪れた理由ですが、実は魔族領にて洋服屋を営んでおります」

「洋服屋？」

「シェーン街にも支店がございます」

「そういうば、僕たちがやってきたその日に、猫耳族のために洋服を無償で提供してくれた店があつた。」

「もしかして猫耳族が来た時に洋服をくださったお店ですか？」

「エンゲージさんが顔いっぱい笑みを浮かべて頷いた。」

「あの時はとても大変だったのですがごく助かりました！ ありがとうございます」

「いえいえ。エヴァ様を助けてくださったワタル様と猫耳族の皆さんに当然のことをしたまです。それで、本日訪れた本題になりますが、白狐族の毛変わりのできる毛玉があると聞きまして」

「僕は庭の隅に置かれた毛玉を見つめる。大きすぎて壁を越えて外からでも見えるほどだ。」

「エレンちゃんと僕と一緒に毛玉を指す。」

「そこにありますよー」

「お二人はとても仲がよいんですね。それで、あの毛玉で私どもに洋服を作らせていただけませんか？ 白狐族の抜け毛は魔族にとって価値のある防具になるのです」

「防具ですか？」

「ええ。防具と聞くと鎧や盾を想像すると思いますが、何もそれだけが防具というわけではありません。敵の攻撃を防いでくれるものが防具なのです。姿形は関係ないのです。白狐族の抜け毛で作

る防具の一番よいところは——魔族にとって一番の天敵である雷魔法と光魔法に対する絶対的な耐性を持つていることです」

「白狐族って雷を撃ちますもんね」

「ええ。それだけでなく女神様に愛された種族でもあります。雷は光の象徴で、世界でも白狐族と勇者にしか使うことが許されておりません。これだけの量ですと、シェーン街に住んでいる全ての魔族たちを守るだけの防具を作れると思います。毛玉の買い取り価格はワタル様の言い値で構いません。どうかよろしくお願いします」

「一つ聞いてもいいですか？」

「どうぞ」

「僕の言い値で仕入れたら、魔族のみなさんが買える値段で洋服を売って利益を得るのは難しいと思っんですけど……」

「彼は満面の笑みを浮かべた。」

「我々がこうして洋服屋としてやっていけているのは皆さんのおかげなんです。まだ人族との戦いが終わっていないこの地に住み守ってくれる皆さんのために、少しでも私たちにできることをしたいと考えております」

「儲けを出そうと思つたら、毛玉の価値を偽って安く買い取ることだつてできると思う。僕もエレンちゃんも子どもだし、ここには大人がいなからそういうことは簡単なはずだ。」

だけどもつまづぐな眼差しからは、多くの魔族を守りたいという思いが伝わってくる。

「分かりました。では洋服の代金の支払いは僕の口座から——」

「お待ちください。ワタル様」

「はい？」

「こちらの服はシェーン街に住まう皆様への心の拠りどころになってほしいこともございまして、我が社で無償で提供させていただきます」

「そうですか！ ならこの毛玉はタダでさしあげますよ！」

「いけません！ これほど高額なものを……」

「いえ！ それでしたらエンゲージさんのお店だって赤字じゃないですか！」

「いえ！ 我々は今まで皆様のおかげで繁盛して……」

「いえ！ これで大きな赤字になってしまつて、経営が大変になっては皆さんが困ります！」

エンゲージさんとそんなやり取りをしていたら、僕たちの間にびよっと横からスライムが現れた。

驚いて横を見ると、エレナちゃんがムツとした表情でスライムを差し出してた。

「二人とも、それじゃ終わらないよ？」

「あはは……」

「二人ともいいことするんだからお互いに文句言わないの！」

「は、は……」

「はい。エンゲージさんもスライムを抱っこ！」

そしてお互いにスライムを抱きかかえて、エレナちゃんが淹れてくれた紅茶を飲む。

こうしてエレナちゃんの仲裁(?)によつて、白狐族の毛はエンゲージさんの洋服屋に提供することが決まり、代わりに洋服はシェーン街の住民へ無償提供されることが決まった。

もちろん他にかかる経費に関しては、うちの『ぼよんぼよんリラックス』が全面的に協力するということになったけど、僕の通帳に貯まるばかりの貯金はまだまだ減る気配がない。

エンゲージさんが「エヴァ様に聞いていた以上に優しい方でした……」と苦笑いを浮かべていたのが印象的だった。

翌日。

「ワタル、またスライムたちが増えたよ？」

「そうみたいだね。今回は青色スライムも増えたみたいだ」

庭にある泉からたくさんさんのスライムたちが外に出てきた。先日もたくさん増えてたのに、今日もたくさん増えている。

今では水色スライムが六百匹、青色スライムが二百匹、緑色スライムが百匹に増えた。

合計すると、九百匹にも及ぶ数になる。

「フウちゃん、ムイちゃん。みんなをよろしくね」

『あい！ ご主人様！』

二匹を撫でてから、他の子たちもエレナちゃんと手分けして撫でて、僕たちは屋敷を後にした。

やってきたのはシェーン街から少し離れた場所に設けられたテントの野営地だ。

ここには魔物が近づけないようにしてあるけど、それでも念を入れて多くの白狐たちに護衛をお願いしている。

「ワタルくん。いらっしやい」

丁度エヴァさんが出迎えてくれたので、そのままテントの中に入る。聖女ステラさんも一緒だ。

長い机が左右と奥に並んでいるけど、それに比べて椅子の数は少ない。

ここは、明日行われる予定の魔族と人族の対談の会場だ。

シェーン街から離れた場所なのは、魔族がまだ人族を信頼していないことと人族に畏ではないことをアピールする目的を兼ねている。

念のために、もし戦いになったら僕がエヴァさんたちを連れて急いで逃げる作戦になっているけど、そうはならない気がする。あれだけ優しいステラさんが関わっている人なら信頼に値すると思うから。

場所の確認が終わり、テント周辺を散策してみる。

僕のスキル【リーダー】には多くの青い点が見えている。この青い点は敵意のない人を示している。しかも——少し離れた場所にあるテントにもたくさん青い点が見える。

そこには明日の対談のために来ている多くの人族がいるのだ。

まだ対談が始まってもないのに、中立の黄色ではなく味方を示す青色なのに少し驚いた。

「ステラさん。向こうに人族の皆さんがいるみたいなので、先に挨拶に行きましょうか」

「分かりました。私は対談の時は向こう側についていた方が色々都合がよさそうですね」

そもそも聖女であるステラさんが魔族領にいるって、よく許可が出たものだなと思う。

ステラさんとコテツと一緒にゆっくり人族の野営地に入る。

僕たちを見かけた衛兵さんが周囲に知らせると、とんでもない速さでこちらに向かって走ってくる人影が一つ。

「ステラ」

「久しぶり。エレノア」

以前話し合いの場出会ったステラさんの護衛騎士のエレノアさんだ。

今日も無表情のままだけど、ものすごく嬉しそうなおーラが感じられる。

やってきたエレノアさんは、すぐにステラさんに抱きついた。

「もう離さない」

「ふふっ。それでは困っちゃうわ。明日は対談もあるし、今日は教皇様にも会わなくちゃ」

「そうだった。教皇が待つてる」

「ええ。案内お願いね。ワタル様もいきますか？」

「いえ。明日会場でエヴァさんと一緒にご挨拶させていただきます」

「分かりました」

ステラさんは笑顔を浮かべて僕に向かって会釈し、エレノアさんとテントの中に入っていった。

明日の対談によって人族と魔族の関係が大きく変わる。

今はまだ敵対関係だからか、離れているとはいえ目視できる距離にいる両陣営の皆さんが互いを警戒し続けている。

なんとかみんなが平和に生きられる結果になるように対談に臨みたい。

しかし、その対談でとんでもないことが決まろうとしているなんて、その時の僕は想像だにできなかった。

まさかあんなことが起きるなんて……………。

○

対談の日になった。

少し緊張はするけど、ゆっくり朝食を食べて庭に出ると、今日も増えたスライムたちが僕に近づ

いてきた。

庭を見渡すと、キラリと光る巨大な魔石が目立つ。

スライムは食べたモノを魔素に変換して生きていて、緑色スライムたちはその過程で魔石を生んでくれる。

魔石はダンジョンの魔物を倒した時に稀まれに落とすドロップ品だ。手に入れるためにはダンジョンに潜って魔物と戦う必要があり、高価なものもそういう理由だ。

緑色スライムたちがこうして魔石を生んでくれれば、魔道具が広まって街のためになるかもしれない。

魔石を渡してくれる緑色スライムからは嬉しそうな気持ちが伝わってくる。

「ありがとう！」

緑色スライムたちをなでなでしてあげる。

そしてコテツと一緒に対談の会場に向かった。

会場は物々しい雰囲気にもまれていて、魔族の皆さんは緊張した表情を浮かべていた。

まだお互いわけがかりがあるからね。

会場となる大きい天幕の中に入って自分の席に座って待っていると、外がざわついてきた。

人族が着いたようだ。

「エ、エヴァ様！ 向こうの代表者がやってきました！」

「分かったわ。ここまで丁寧に案内してちょうだい」

「かしこまりました！」

衛兵さんが出てから数分して、大勢の足音が聞こえてきた。

その足取りからは緊張感は伝わってくるものの、魔族に対して敵意むき出しのそれではない。

天幕の入口を衛兵さんが開くと、人族が大勢入ってきた。中には以前会った人もいる。

それぞれの代表者がテーブルの前に立ち、護衛の方々が後ろに立つ。

「初めまして。魔族の代表の魔王エヴァと申します」

「丁寧なご挨拶、痛み入ります。私は人族の代表の一人、ホーリーランド神聖国の教皇アダムと申します」

教皇様は神聖国で一番偉い人だ。

「わしはバンガルシア帝国の帝王ギルガメッシュ・ベル・バンガルシアである。帝王としてこの場に参っているので敬語は使わないことを理解してもらおう」

人族最大規模の国である帝国。その王だからこそ、威厳を守るためにこうした振る舞いをすると事前に聞いている。

「初めまして。私はエデンソ王国の女王セリアン・エデンソと申します。どうぞよろしく」

エデンソ王国の王は女王様だ。とても若くエヴァさんや『ぼよんぼよんリラックス』の運営を

担ってくれているセレナさんと近い年齢に見える。

「失礼します。大地の聖女ステラと申します。本日は人族と魔族の対談にお集まりいただきありがとうございます。私には人族ではありませんが、司会として中立の立場から務めさせていただきます。

そして、私と共に人族と魔族の架け橋となられるお方——ワタル様をご紹介します」

「ワ、ワタルです！ よろしくお願ひします！」

皆さんの視線が僕に集まる。緊張もあつて自分の顔が強張るのが分かる。

こういう大勢の人の前で何かを話すのは苦手で、前世でも色々苦労していたっけ……。

挨拶も終わったので、それぞれの代表者が席に座る。魔族側はエヴァさんと僕が座った。ちょっとだけ場違いに感じてしまう。

こうして人族と魔族の対談が始まった。

座って早々、目の前の水を一気飲みする。自分の一言で状況が大きく変わると思うと緊張して上手く喋れるか不安になる。

「ではまず、魔族側の意見をお聞かせ願えますか？」

皆さんの視線がエヴァさんに集まった。

「我々魔族は最初から人族との争いなど望んでいません。それは今でも変わりません」

今回の戦争も元を辿れば、勇者一人のわがままから始まったはずだ。

「我々としては、これ以上の戦いは望みません。そう願っています」

「ありがとうございます。では、人族を代表して教皇様。お願いします」

「事前にエレノアから話を聞いておりましたが、こうして魔王様から直接戦いの意思がないと聞くことができ、とても嬉しく思います。我々としても魔族との戦いは望みません。ですが一方で、人族の中における問題がございます」

同族といっても、国が違えばルールや文化の違いがある。

前世でもそうだったけど、人族同士の問題も大きいのは知っているつもりだ。

「フェアラート王国ですね？」

「ええ。魔族の国エラシアに最も近い国で、今回の戦いの始まりとなった国で今でも戦争を続けたいようですね。我々人族には彼らの意思を無下にすることはできません。どうしても拒否できない理由があるのです」

教皇様は一度呼吸を整える。

「あの国には——勇者様がおります。人族にとって勇者様は誰よりも優先するべき存在です。

今でもフェアラート王国に勇者様が滞在し戦いを望まれているため……我々は彼らに従わざるを得ません……」

「あ、あのー」

手を上げると、ステラさんが優しい笑みを浮かべて小さく頷いてくれる。

「ワタル様。どうぞ」

「その勇者とは……どうやって決めるんですか？」

「それはとても簡単です——勇者の証である聖剣エクスカリバーを持つことができることです」

聖剣エクスカリバー。勇者である証。それはステラさんに聞いている。

「皆さん。今の勇者が聖剣を持つているのは確認できてますか？」

「……それはどういう意味でしょうか？」

「えっと、今、聖剣エクスカリバーを持っているのは誰なのか、皆さんはご存知ですか？」

そう聞くと、みんな顔を見合わせて首を横に振った。

「そもそも聖剣は勇者様にしか持つことができませぬ。今でも勇者様が持っていると思います
が……」

「分かりました。なら一つだけ聞かせてください。もし勇者がいなければ、皆さんは魔族との戦いをやめてくださいますか？」

「ふむ……少なくともここにいる三国はそういうつもりで集まっております」

教皇様が他の王様二人を見つめると、肯定するかのように頷いてくれた。

「分かりました。なら問題は勇者——いえ、聖剣の持ち主の件ですね」

「聖剣の持ち主は勇者様のみ。そこそが女神様が決められたことです」

「そうですね。なら——もし皆さんが知っている勇者が、聖剣を持っていないとしたらどうで

しよう?」

「もしそうでしたらフェアライト王国に正義はないということでしょう。そもそも戦争によつて……負傷者も多くいるのですから」

その答えを聞けたら一安心だ。

僕はその場に立ち名前を呼ぶ。

「コテツ〜!」

僕の足下で待機していたコテツが、机の上に跳び上がってきた。

「犬……?」

「こちらは僕のペットのコテツです」

「ワンワン!」

皆さんが少し驚いた表情でコテツと僕を見る。

「教皇様は聖剣を持つ者が勇者だと仰いましたね? では紹介します。うちのコテツ

の——勇者モードです!」

コテツにスキル【武器防具生成】を使って、聖剣エクスカリバーを召喚する。

コテツが空中に現れた聖剣エクスカリバーを口に啜えると、光り輝いた。

「こ、これは!」

皆さんがその場に立ち上がって驚いている。

「実はこちらに攻めてきた勇者と僕が戦って、その時に聖剣をこちらが保管しました。残念ながら僕は聖剣に認められませんが……うちのコテツは認めてもらえまして、今ではコテツを紹介して僕たちに力を貸してくれています!」

「まさか……聖剣が勇者様の手を離れているとは……そうか……聖剣は今、その犬が啜えているのか……あはは……あははは〜!」

急に教皇様が腹を抱えて笑い始め、周りも釣られて笑顔に染まり始めた。

勇者が使っていた頃と比べると随分と小さくなっているけど、ちゃんともとの聖剣の形を保っているし、コテツから放たれている光は勇者そのものだ。

テーブルの上で聖剣を啜えてドヤ顔をするコテツが凛々しくてかつこよかった。

「皆さん。聖剣に認められたコテツは勇者だと思えます! コテツに強制するつもりはありませんが、魔族の国で僕たちは楽しく生きています。魔族は敵ではありません。聖剣のために戦わなければならなかったのなら……どうかこれを機に、魔族と平和の道を歩いてもらいたいです」

僕の話聞き、誰よりも先にエレノアさんが拍手をしてくれると、ステラさんや他の王様、教皇様までもが拍手を送ってくれる。

みんなが戦いたいわけじゃない。それを深く感じる日となった。

「乾杯〜！」

シェーン街の広場に作られた祭りの会場では、大きなコップを合わせて皆さんが声を上げている。いつもなら魔族や白狐族が集まるのだが、今日はとても珍しく人族も一緒になっている。

うちのコテツが勇者として教皇様と大地の聖女ステラさんに認められたことで、皆さんの信頼を得たようだ。とても柔らかい表情で誰一人武器を携帯していない。

僕はエヴァさんとステラさんと共に人族の皆さんに挨拶をして回る。

バンガルシア帝国、エデンソ王国、ホーリーランド神聖国。王様だけでなく国を担う重鎮の皆さんと挨拶を交わす。

人があまりにも多すぎて全員の名前を覚えられるか心配だけど、礼儀として向こうが先に名乗ってくれるから、それに合わせればいいとステラさんから言われて気が楽になった。

ここ最近では一番慌ただししい一日となったけど、こうして種族を越えて笑顔で美味しい食事を楽しむ姿を見られて、本当に幸せだなと思えた。

人族の皆さんには魔族が人族と変わらず平和を望む、温かい人たちであることを感じてもらえたら嬉しい。

次の日。

今日は改めて各国との対談がある。

昨日のような戦いのことではなく、お互いに手を取り合ったからこそ、これからどういう交流を持つのかを話し合う対談だ。

あとはフェアラート王国をどうするかだけど、勇者の証となる聖剣が手元にないにもかかわらず、周りの国々を騙だまして援助を求めているそうだ。

その話し合いもきつとあるだろう。

朝食を食べてから、皆さんと一緒に会場となるシェーン街の城に向かっていく最中の出来事だった。

街の外から空気を揺らす振動が響いてきた。

「ワ、ワタルッ！ 外が大変だよ！」

慌てたエレナちゃんが遠くから走ってきて声を上げた。

対談があるけど、何よりも皆さんの安全が優先なので、僕は急いで街の外に向かった。

街を囲む城壁の外。

そこに広がっていたのは地面を覆う大きな影。

曇りならそれも理解できるけど、今日は晴天だ。そもそもこのエデンイール世界は争いの前兆以外では雨は降らない。だから曇るってこともない。

なのに大地を覆う影の存在というのは——その理由は、船だ。そう。船。

ただし、こちらから見えるのは船の底の部分だ。

僕たちが見上げているのは、文字通り「空飛ぶ船」である。

「すごい！ ワタルッ！ 船が飛んでるよ〜？」

「そ、そうだね。まさかこんなにも早く完成するとは思ひもしなかったよ」

ゆっくりと城壁のすぐ傍に下りてくる空飛ぶ船。

甲板のところどころに向かって手を振るのは、グライン街に住む魔道具研究者のリオくと幼馴染のシアラちゃんだ。

「シアラちゃん！ 久しぶり〜！」

「ワタルくん〜！ エレナちゃん〜！ やっほ〜！」

お互いの声は届かないけど、なんとなく伝わってくる。

空飛ぶ船から城壁へ大きな渡り橋が架けられシアラちゃんがやってきた。

「みんな〜久しぶり！ リオはすぐに来ると思う〜！」

「うん！ まさかこんなにも早くできるなんて思わなかったよ！」

以前、リオくんの人に運ぶことのできる飛行艇を作ってほしいと頼んでいたのだ。

「ふふっ。グライン街のみんなが手伝ってくれたんだ。それに——ホワイトナイトの件がみんなにもすごい刺激になったんだ！」

「そうだったんだ……皆さんに感謝しないと！」

そこへ空飛ぶ船の中から複数人の魔族が軽やかな足取りでやってきた。

「リオくん！」

「やあ。ワタル。元気そうで何よりだよ」

「リオくんもね。それにしても早すぎだよ〜」

「まあ、色々あってさ。それに関しては今度話すとして、エヴァ様に僕を紹介してくれるか？」

「多分今頃向かってくれると思う。少しここで待とうか」

「ああ」

リオくんが乗ってきた空飛ぶ船を眺める。

城壁と同じくらいの高さがあり、形は船そのもの。

前世の飛行機のような羽はなく、だからといってプロペラみたいなものも見当たらない。

見た目だけなら海に浮かんでいてもなんら違和感のない船だ。それがこんな平原に立っている。着地する際には本体を支える脚が現れる仕組みのようだ。



「ワタルくん！」

遠くから声が聞こえて、慌てた様子のエヴァさんたちの姿が見える。他国の代表の皆さんも一
緒だ。

「エヴァさん！ こちらは友達のリオくんです！」

「ワタル。もうちよつと近づいてから紹介してくれ」

「あ、そ、それはそうだね」

呆れたように溜息を吐くリオくんは、シアラちゃんがクスクスと笑った。

皆さんがやってきたので、リオくんを紹介する。

「エヴァさん。紹介します。グライン街で魔道具の研究をしているリオくんです。以前僕が大型船
の製作をお願いしたんですけど、こんなに早く完成するとは思わなくてびっくりします。もつと
時間がかかると思っていました」

「初めまして。エヴァよ」

「お会いできて光栄です。グライン街で魔道具研究者をやっているリオです」

エヴァさんとリオくんが握手を交わす。

「まさかこんなものを作ろうと思っていたなんて……ワタルくんっていつもとんでもないわね」

「あはは……リオくん。後ろの皆さんは、昨日対談のために来てくださった人族の方々だよ」

「人族？ まあワタルがいるんだし、気にする必要はないか」

リオくんはエヴァさんたちに挨拶をし、僕は船の製作を手伝ってくれたというチームメンバーの六人の魔族と挨拶を交わす。

みんな白衣を着込んでいて研究者っぽいといえば研究者っぽいね。

空飛ぶ船に興味津々な皆さんに、リオくんが詳細を説明してくれる。もちろん人族の皆さんも集中して聞いていた。

こういうワクワクするものは種族や国関係なく、みんなに届くものだね。これをきっかけにより仲良くなれたら嬉しいな。

説明が終わると、おもむろにエヴァさんが僕に聞いてきた。

「ワタルくん。この船の名前は？」

「名前ですか？ リオくんこの船の名前は？」

「ん？ なぜそれを僕に聞くんさい？ この船は——ワタルのものだから、名前もワタル

がつけるんだぞ？」

みんなの視線が僕に集まる。

「ええええ！」

「本人が驚いている！」

「だって、作ってくれたのはリオくんだから……」

「いやいや、資金も素材もアイデアも全てワタルが提供してくれたからな。真正銘ワタルの所有

物だよ。この船は」

確かに心臓部分となる素材とか資金とか色々提供しているけど……でも実際に作ってくれたのは彼なのに……。

「むしろ、こんな大作に関わらせてもらえただけで名誉あることだよ」

「そ、そういうもんなの？」

「ああ。だから気にせずこの船は自分のモノとして考えてくれ。船の名前もワタルが決めてな？」

「……エヴァさん！」

「もらわないわよ？」

「そんな……」

「こんなすごいものはもらえないからね!? ワタルくん！」

エヴァさんの反応にみんなが笑い声を上げた。

元々はエヴァさんのところで役に立ててもらえたらいいなと思って作ったものなんだけど……自分で色々考えなくちゃいけなくなっちゃった。

「ワタルッ！ 船の名前はどようするの？」

「ううっ……」

名前……どうしよう……。

「どんなかつこいい名前になるのか楽しみ〜！」

みんなが僕に注目する。

うう……こういうのは慣れていないんだけどな……。

ただの飛空艇とかじゃダメかな？ 多くの人や荷物を乗せて運ぶ。そんな思いを込めたい。その時、ふと人族の皆さんが視界に映った。

最初は魔族のために欲しいと願っていたけど、人族との架け橋にもなってくれるんじゃないか？

「魔族と人族の架け橋……種族の壁を越えた理想郷……この船にはそういう存在になってほしい。」

だから船の名前は——理想郷ユートピア。ユートピア号はどうかかな？」

エレナちゃんたちが一瞬だけ考え込むと、すぐに歓声を上げた。

「うん！ とても素敵な名前だと思う！ 意味はよく分からないけど」

前世の知識から名前をつけたけど、でも思いはしつかり込められた気がする。

「ではこちらの飛空艇は、オーナーであるワタルの意向により、ユートピア号と命名された！ みんな、すぐに下部に名前を刻むよ！」

「「イエッサー」」

リオくんの指示で作業員の皆さんが船の下部に向かう。

その様子を見てみると、みんなリオくんのゴーレム、ホワイトナイトに似たゴーレムに乗っている。

「あれ？ ホワイトナイト増えたね？」

「ああ。それもまたいずれ話すよ。長くなるから。それより、僕はこれからグライン街に戻りたい。だから一度船をグライン街まで運ぶから、その間に操縦方法を聞いてくれ」

「ええええ!? リオくんが船長になってくれるんじゃないの!？」

「勘弁してくれ。僕はずっと研究がしたいんだ。そもそも船はワタルのものなんだからな。それはそれとして、僕にこれからも投資してくれよな？」

「あはは……もちろん！ こんな素敵な船を作ってくれたんだもの。僕の貯金なら好きにだけ使ってくれて構わないよ」

「おおお！ それは助かる〜！」

正直、お金の使い道もなかったもので、これからリオくんが色々開発してくれたら魔族だけでなく多くの人族も助かるかもしれない。それくらい魔道具は便利なものだから。

すると教皇様が口を開く。

「ワタル様。もしよろしければ、我々も一緒に搭乗させていただいても？ 時間がかかるのなら船内です話し合いを行いたいのですが……」

「えっと、僕は構わないんですが……」

それを聞いてエデンソ王国の女王様も言う。

「あら、いい考えですね。ワタルくんが魔族と人族の架け橋になってほしいと願って名前をつけた船ですもの。対談に一番よい場所かもしれませんわ」

「はい。その通りでございます。皆様も問題ありませんね？」

教皇様の質問に各国の王様たちも二つ返事で、ユートピア号の移動中に対談を行うことになった。急な登場となったユートピア号だったけど、リオくんたちを送るためにグライン街に向かって出発する。

もちろん、使用人数が限られる転移スキルを使っていた今までの旅とは違って、行きたい人はみんな乗れるし、僕の従魔のスライムたちもたくさん乗り込んできた。

——しかし、この一件で世界がとんでもないことになるのは、その時の僕は知る由もなかった。

第2話

空を飛ぶユートピア号。

乗り心地は非常に安定していて、前世で数回乗ったことがある飛行機に比べても負けなくらい揺れもない。

外を見なければ、飛んでいるのを忘れてしまうほどだ。

一応飛んでいる間も甲板に出られる仕組みになっているけど、実は透明なガラスで覆われていて、

外から何かが入ることはできないし、外の風を感じることもない。

「すごい！ 雲がすぐ上だよ！ ワタルッ！」

エレナちゃんが嬉しそうに雲を指差しながら、びよんびよんと跳びはねる。

それに合わせてスライムたちも嬉しそうにびよんびよんと跳びはねて、とても可愛い。

ずっと僕と一緒に旅に出たかったみたいで、こうして来られてすごく嬉しいみたい。

コテツに至っては、跳びはねるスライムたちにぼよんぼよんされて、トランポリンのように跳びはねて遊んでいた。

空の景色を堪能してから、僕はリオくんにつきっきりで色々教わることになったけど、難しくて全部覚えるのは無理そうだった。

一応、こういう時のためにリオくんが事前にユートピア号の乗組員たちを募ってくれていて、彼らにはユートピア号の隅々まで覚えてもらったそうだ。

それに何度も感謝を伝えて、正式にお願いすることになった。

ひと通り説明を聞いた後、エレナちゃんに連れられてとある場所に向かう。

そこに広がっていた光景は——

「んおおおおお！ こ、これはあああああ！」

ベッドにうつ伏せになっている教皇様が声を上げる。

それを一緒に眺めている皆さんも「おおお！」と声を上げた。
教皇様の背中や腰の上でスライムたちが一生懸命にぼよんぼよんと跳びはねている。

「なんて……なんて気持ちいいんだあ〜！ これが……これが女神様がもたらしてくださった奇跡！」

ええええ!? それはちよつと違うと思うんだけど……。

一緒に眺めていた神聖国の人々が祈りを捧げ始めた。

なかなか不思議な光景だ。

「ワタル様」

「うわあつ!? エレノアさん？」

「私も受けたい」

「い、いいですよ？ というか、スライムたちも喜んでくれますし、ぜひ皆さんも！」

スライムたちに魔族と人族に仲良くしてほしいという僕の気持ちが伝わったみたいで、こうして人族の皆さんが喜んでくれるのが嬉しいみたい。もちろん——僕もとても嬉しい！

ステラさんが苦笑いを浮かべて「ごめんさい」と頭を下げた。

「いえいえ。これでスライムたちが無害だと皆さんに伝われば僕も嬉しいですから。エレノアさん。こちらのベッドにどうぞ」

「うん」

エレノアさんが教皇様の隣のベッドにうつ伏せになった。

「みんな。エレノアさんもよろしくね！」

スライムたちがエレノアさんの背中や腰、足の上で跳ね始める。

「っ!? えっ!? ん……あつ……あ……ん……」

「あのエレノア様が……感情を表に出されただど!?」

「おおおお！ 奇跡だ……これは奇跡に他ならない！」

神聖国の皆さんはさらに祈りを捧げ始めた。

「スライム……侮れない……気持ちいい……」

エレノアさんも満喫してくれたようで何よりだ。

それを見ていた他国の皆さんも体験したいとのことで、『ぼよんぼよんリラックス』の「ユートピア号支店」を急遽開くことになった。

最初こそ不思議そうにしていた多くの人たちが、少しずつスライムたちの虜とらになっていく。

それこそ威厳ある帝王様も、今ではすっかりスライムを膝の上に乗せてご満悦な表情を浮かべている。

人族にもスライムマッサージは有効なようであった。

マッサージが一旦終わり、グライン街に着いたことでリオくんたちが先に船を降りた。

まだ話し合いを行っていないだったので、僕たちはそのまま話し合いに臨むことになった。個室に向かうと、代表者たちが重苦しい空気の中で待っていた。

「ワタル様はこちらに座ってください」

ステラさんがなぜか中央に置かれたソファアに案内してくれる。

部屋内があまりにも重い空気だったため、何も言わずに素直に従うことに。

一応、入口付近ではエレナちゃんとコテツ、スライムのフウちゃんが見守ってくれている。

「では、魔族の国エラシアとホーリーランド神聖国、バンガルシア帝国、エデンソ王国の正式な四国会談を始めます」

皆さんが立ち上がり、軽く会釈して座った。

え、えっと!? ぼ、僕もやった方が……よかったのかな? ルールがよく分からなくて僕だけ座ったままだった。

「今回の会談の主題ですが、交流のためお互いにどう歩み寄るかになります」

ステラさんの言葉に、誰よりも素早く教皇様が手を挙げた。

「教皇様。どうぞ」

「ごほん。我々はあまりにも魔族のことが分かっておりません。女神様の教えは勇者様に力を貸し、魔王を倒すこと。ですが、ここで指す魔王というのは、魔族の国の王ではなく、世界を滅ぼす悪を指します。私にはここ数日でエヴァ様からそういう気配は一切感じておりません」

「それに関しては私、大地の聖女ステラの名においても同感でございます」

「本来なら魔族から一番遠いところにある神聖国ですが、これからはお互いに歩み寄りが必要かと思いました。それに先んじて、我が国に魔物であるスライムたちを——」

「待て、教皇よ! そちらの神聖国は魔族の国から一番遠い。ならば一番近い我が帝国が最初に試すべきだ!」

急に帝王様が割り込んでくる。

い、一体なんの話……なのかな?

「お二人ともお待ちになって。魔物を国の中心に置くのは非常に危険です。それも聖都と帝都となればなおさらです。私めの国の王都で先に——」

「ワタルくん! まだうちの魔族の国でも開いてない街が——」

みんなが同時に声を上げて、何を言っているのか分からないけど、なんとなく分かった気がする。だって、皆さんの膝の上には——スライムたちがいて、皆さんが愛くるしそうに撫でている。

「ま、待ってください! もしかして……『ぼよんぼよんリラックス』の話なんですか?」

皆さんが同時に大きく頷いた。

「か、会談……なのに……どうして『ぼよんぼよんリラックス』が……?」

「ワタル様。『ぼよんぼよんリラックス』は女神様の寵愛を受けたワタル様だからこそ可能にできた素晴らしい店です! これはぜひとも多くの人々に伝えねばなりません。ええ。そうですとも」

「同感だ。我が国には今のところ魔族による感情を持つている者は限りなく少ない。だが、スライムたちと触れ合うことができれば、魔族にも興味を持つことだろう」

「間違いありませんわ。我が国には色んな店がありますが……こちらのようなマッサージ店は見たこともありません。世界最高峰の店に間違いないですわ」

それぞれの国の代表の皆さんに、スライムたちが認められたようでも嬉しくない。

でも……それは逆に言えば、スライムたちにまた頑張ってもらわないといけないことになる。

しかも、魔族の国内なら会いに行くのも自由にできるけど、他国ともなれば……少し難しくなる。その時、フウちゃんが僕の膝に乗ってきた。

「フウちゃん？」

『私たち！ ご主人様！ 大好き！ 力！ なる！』

「フウちゃん……みんな……」

スライムたちから優しい気持ち伝わってくる。

既に——他国でも頑張ろうと覚悟を決めたかのような。

「あれ……？ もしかして、最近スライムたちが増えているのって、みんなこれを見越して……？」
僕の質問を肯定するかのようにフウちゃんが僕の腹に擦り寄ってきた。

そう……だったんだ。みんな、こうなるって見越して、いつでも対応できるように……だから

ユートピア号にも乗りたそうだったんだね。

「そっか。分かった。みんなありがとう！ みんなのおかげで魔族も僕も……多くの人族と交流を持てると思う！」

「ワタル様。我々も決して彼らを無下にするような扱いはいたしません。私が責任を持って守ると誓いましょう」

「我が帝国でも我が名において、傷一つつけないと約束しよう」

「エデンソ王国も必ずやスライムたちを守ってみせますわ」

「皆さん……はい。よろしくお願いします」

「では、ワタル様……我々の国にも『ぼよんぼよんリラックス』の支店を作ってくださいることよろしいですね？」

「分かりました。ただ、建物とか従業員とか——」

「それらは全てこちらに任せてください。護衛から建物まで全てご用意いたしますよう」

「はい。では『ぼよんぼよんリラックス』の店長をお願いしているセレナさんと支店をどういう形で開くか相談して決めることにします」

皆さんはとても嬉しそうに頷いてくれた。

ステラさんが話し始める。

「では次の議題になります。私からもう一つ提案がございます。人族には学校というものがあり、

多くの生徒が勉強に励んでおります。そこで、ぜひとも——学生たちが魔族の国エラシアを訪れる短期留学をさせていただきたいと思っております」

「短期留学……?!」

「若者は国の未来です。若者から歩み寄って内情を知ること、より魔族の皆さんを深く知ることができると思っています。その際には我々の聖騎士も同行させ間を取り持ちますので」

「そっか……聖騎士がいれば、親御さんも納得させやすく、学生の皆さんも安心して来れるってことですね?」

「さようでございます。エヴァ様はいかがでしょう?」

「分かりました。魔族には学校という概念がありませんが、シェーン街では猫耳族をはじめとし、『ぼよんぼよんリラックス』で働けるような人材を育てる学び場を作ることになっています」

「ええええ!? いつの間にかそんなことが進んでいたの!」

「その運営メンバーも若者で構成されていますから、若者同士の交流にはとてもいいかと思えますので受け入れましょう。ただ、これには私から一つ提案がございます。ワタルくん」

「僕ですか?」

「短期留学……ここで必ずやってほしいことがあるわ。必ず……留学生の移動にはユートピア号もしくは白狐族に協力をお願いしたいと思う。残念ながら魔族の中には人族をよしと思わない者もいる。でも白狐族が護衛にいてくれれば、問題ないと思う」

「ユートピア号に関しては、とても光栄なことですので移動はお任せください。白狐族のリアムさんたちにもすぐに相談してみます」

「ええ。ありがとう」

すると今度は帝王様が手を挙げた。

「バンガルシア帝国からの提案だが——武闘会を開きたい」

「武闘会……ですか?」

「我が帝国にはコロッセウムという競技場がある。そこではお互いに戦い競い合う。市民たちはそれを見物に訪れ、娯楽の一つにもなっている」

「それって……お互いの命を……」

「昔はそういうルールもあったが、今はルールを変えている。せつかくの優秀な人材に命を落とされたくはないのでな。今では気絶や負けを認めた場合や、こちらが厳選した三人の審判のうち、誰か一人でも負けだと判断した場合に、負けとする仕組みになっている。もちろん、公平性を保つ仕組みで開かれておる」

「それなら少し安心できます」

「魔族の強さには目を見張るものがある。それを帝国の多くの者が知れば、魔族を認める者もたくさんでてこよう。それと神聖国の短期留学には我が帝国の学園も参加したい」

帝王様の言葉を聞いたエヴァさんが小さく笑みを浮かべた。

「ふふっ。うちにも血の気が多い者が多いから、武闘会はとて面白い提案ですわね。参加したい者はたくさんいると思いますし、こちらも受けることにしましょう」

最後にエデンソ王国の女王様が手を挙げた。

「我が国は長年商売を営んできました。それを生かし、魔族の国との交易を求めます。ただそこで最も支障となるのは移動です。そこをこちらのユートピア号が担ってくだされば、お互いにとても良好な交易ができるかと思えます。いかがでしょうか？」

「魔族に新しい素材がもたらされたら、きつとためになると思えますし、交易はぜひお願いしたいと思えますけど、僕としては魔族の国エラシアを優先して協力したいと考えています。エヴァさんの意思を尊重したいと思います」

女王様と僕がエヴァさんを見つめる。

「私としても交易はぜひお願いしたいわ。間にワタルくんがいてくれたら心強いし、私たちも安心できるもの。きつとエデンソ王国や皆様もそうでしょうし」

「ええ。この交易は人族と魔族の間のもですが、そこにワタル様がいらっしやらなければ成り立ちません。ぜひともお願いしたく存じます」

なぜかメインが『ぼよんぼよんリラックス』の話になっていたけど、無事それぞれの国と魔族に繋がりができたのは嬉しい。

フェアラート王国に関しては、各国から聖剣の在り処の件で問い詰め支援を打ち切ることが決定

した。

援助はともかく、戦争によって多くの人が傷ついてしまっって、各国も困っていた。本当に必要な戦争なのかと疑問に思っていたところだったみたい。

会談が終わったので、シエーン街に向かって二度目の空の旅を始める。

僕やエレナちゃんは外の景色を堪能していたけど、大人たちはみんなスライムたちとの時間を優先していた。

ユートピア号のスピードは僕が思っていたよりもずっと速くて、シエーン街まであっという間に戻ってきた。

エヴァさんやエレナちゃん、エレノアさんたちが降りたところで、教皇様たちが僕のところにやってきた。

「ワタル様」

「はいー」

「一つお願いがございます」

「お願いですか？」

「もしよろしければ——我々をこのままユートピア号で送っていただくことはできないでしょうか？」

ユートピア号は人だけでなく荷物を大量に積める設計にもなっている。

皆さんや荷物を乗せて飛ぶことはそう難しいことじゃない。

「船長〜！」

リオくんが集めてくれた乗組員の一人で船長を務めてくれている方を呼ぶ。

「はいっ。ワタル様」

「ここから皆さんのところまで飛べるエネルギーは残っていますか？」

「すぐに確認をして参ります」

色々確認してくれる船長の様子をみんなで見守る。

ほどなくして柔らかな表情で船長が戻ってきた。

「お待たせしました。今のままでは厳しいようでした、シエーン街の魔石の在庫を確認してみたところ、どうやらワタル様が保有されている魔石があるとのことで、確認してみると十分な量でございました」

僕が貯蔵している魔石というのは——緑色スライムたちが作ってくれた魔石のことだ。

「分かりました。貯蔵分は自由に使つていいので、これから皆さんを送りましょう」

「かしこまりました。すぐに準備いたします」

いつか魔道具にたくさん使う時に放出するつもりだったし、売りたくなかったのもあって貯めていたのが、ここで大きな助けになって嬉しい。

ユートピア号だけじゃなくてスライムたちもしっかり魔族と人族の架け橋になってくれるんだね。

シエーン街に帰ってきたばかりだけど、休む間もなく皆さんが慌ただしく動いてくれる。飛行中の作業自体はあまりないからと、ここからが本番だと頑張ってくれる。

人族の皆さんの荷物もユートピア号に積みつつ、船長が飛行ルートを確認して、最初に向かう街が——魔族の国エラシアから一番遠い国でもあるホーリーランド神聖国の首都である聖都に決まった。

どうやら『ぼよんぼよんリラックス』をできるだけ長く体験できるから、一番遠い国からになったみたいだ。元々帰国にかかる時間を事前に見込んであったから急いで帰る必要はないからでもあ
るみたい。

本日三度目の空の旅が始まる。

距離から計算した感じだと、聖都に着いた頃には夕方近くなるはずだから、一泊することになり
そう。

まさか……こんなにも早く他国に行く日が来るとは思わなかった。

ユートピア号の中にはくつろげる場所がたくさんあって、エレナちゃんと二人で船内を探検しな
がら時間を過ごす。

しばらく飛んでいると、神聖国の領内に入ったのをきっかけに、ステラさんと一緒に甲板に出て
見えた町の名前や特産品などを教えてもらった。

ステラさんにとって大事な町々なのが伝わってくる。